

# 対馬海域のマアナゴ漁獲動向と資源管理

資源海洋部 底魚資源グループ 酒井 猛

## はじめに

かつて、我が国最大のマアナゴの産地は、瀬戸内海でした。しかし、瀬戸内海区のあなご類漁獲量は年々減少し、2015年以降は年間1,000トンを下回るようになっていきました。一方、東シナ海区での漁獲量は概ね1,000トン前後で推移しており、近年の漁獲量は瀬戸内海区を上回って、我が国において最大の漁獲を担う海区となりました。東シナ海区の中での近年の漁獲量割合は、長崎県が6割、山口県、福岡県がそれぞれ2割で、2016年は東シナ海区の漁獲量のうち98%がこの3県によるものでした。

長崎・山口・福岡のマアナゴを対象とする漁業は主として対馬海峡およびその周辺海域で行われており、対馬市、下関市、宗像市等に水揚げされています。ここでは、現在、我が国最大のマアナゴ産地となっている対馬における漁業について記し、また下関を最大の根拠地とする沖合底びき網漁業（沖底）による漁獲についても述べます。

## 対馬におけるあなご筒漁業

都道府県別あなご類漁獲量をみると、近年では長崎県が最大で、この長崎県での漁獲の9割以上をあなご筒漁業が盛んな対馬が占めます。あなご筒漁業では、餌の入ったプラスチックの筒を長いロープにたくさんとりつけて海中に沈めておき、筒に入ってきたマアナゴを漁獲します。対馬のあなご筒漁業は2000年代に入って以前より盛んに行われるようになりましたが、現在では知名度も上がり、対馬のマアナゴは全国に出荷されるようになっています。

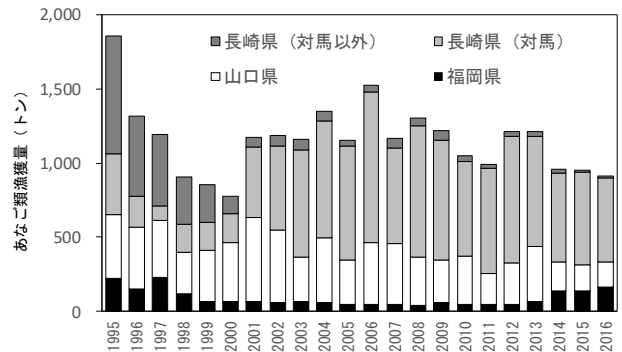
対馬におけるあなご類の漁獲量は、1997年の100トンから年々増加し、2006年には1,016トンとなりました。以降は概ね600～900トンで増減しています。

対馬のあなご筒漁業では、筒の数、幹縄（ロープ）の長さ、休漁日等について、自主的に操業規制が行われています。また、マアナゴ小型魚の保護を目的として、筒の水抜き穴を大きくする取り組みも実施されています。さらに、後述する沖底とのトラブル回避のため、一部で操業時間や漁場の調整等の対策が行われています。

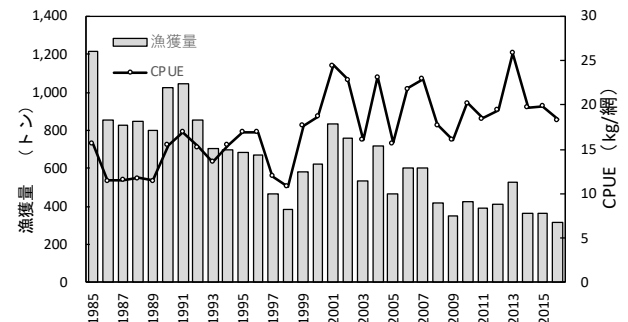
## 沖合底びき網漁業

下関市、浜田市、佐世保市を根拠地とする沖底も対馬海峡周辺海域であなご類を漁獲しています。島根県浜田以西における2そうびき沖底によるアナゴ・ハモ類漁獲量（大部分はマアナゴ）は、1985年に1,213トンありましたが、減船の影響も大きく、変動しながら減少傾向にあります。一方、CPUE（1網あたり漁獲量）をみると、1985～1998年は、概ね14kg/網前後で変動していたものが、1999年以降は20kg/網前後で増減するようになってい

ます。1999年以降、CPUEは変動しながらも高いところがあり、この海域の資源水準は比較的良好な状態にあると考えられます。沖底では資源保護のための夏場の休漁や、あなご筒漁業を含む沿岸漁業とのトラブル回避のため、操業時間の調整等の対策が行われています。



対馬海峡周辺海域（東シナ海区）におけるあなご類漁獲量



沖合底びき網漁業（2そうびき・浜田以西）におけるあなご・はも類（2013年以降はマアナゴのみ）の漁獲量とCPUE（1網あたり漁獲量）

## 資源管理

マアナゴの産卵場は沖ノ鳥島の南方にあり、そこから日本周辺に幼生が流されてきて成長し、漁獲の対象となると考えられています。対馬海峡周辺海域でのマアナゴ資源を有効に利用するためには、他の海域と同様、小型魚の保護をメインとする成長管理と呼ばれる取り組みを継続、また強化し、成長乱獲を防ぐような管理（小さいときに漁獲せずに、もっと大きくしてから漁獲する）が求められます。ただし、対馬海域と漁場を接する韓国では、近年我が国の漁獲量を大きく上回る年間15,000～20,000トンが漁獲されており、また我が国水域における外国のあなご筒漁船の無許可操業も問題となっています。我が国だけでの資源管理施策の効果は限定的であろうと思われるので、外国と協力して適切に資源を利用していくことが必要です。